

# がんの教室

田中 伸哉

②

がんを直接切除する外科手術で、近年注目されているのが、薬でがんを光らせて判別する方法だ。「光線力学診断」などと呼ばれる。

がんの摘出手術では、摘出しようとしている箇所が腫瘍なのか、正常なのか分かりにくいことがある。そこで、がん細胞

## 光線力学診断とは



## 病巣を薬で光らせ判別

の中でだけ光る特性があるアミノレフリン酸という薬を使う。

手術前に、この薬を注射しておく。そして手術中に部屋の電気を消し、がんは紫外線をあて

る。すると赤みがかったオレンジ色にがんが光る。その光る部分を目印に微小ながんも取り除くのだ。

夜光塗料を工事現場などの危険な箇所に塗って

おき、暗闇でも注意喚起できるようにするようになるのだ。

この手法は、特に悪性の脳腫瘍で使われることが多い。脳腫瘍は、中心部分は塊だが、周囲には

に1人がかかる。悪性度の高い脳腫瘍の5年生存率は約10%で通常のがんに比べて特に悪い。1980年代に「炎のストッパー」の称号で活躍したプロ野球の故津田恒実投手がかかったことで記憶している人も多いだろう。

らばらとがん細胞が散らばっているので取り除くことが難しい。やみくもに取ると脳機能を傷つけ、会話や手足の動きに障害が出る危険がある。だから手術では、顕微鏡で患部を見ながら、小さなスプーンのような器具で少しずつ丁寧に取っていく。

「光線力学診断」は広く行われている。道内では札幌・柏葉脳神経外科の金子貞男院長が先駆者だ。北大病院、札幌大病院、中村記念病院などでも行われている。昨年から光のもととなる薬も保険で認可されたので、患者には朗報だ。

脳腫瘍はおよそ1万人

教授)  
(北大医学部腫瘍病理学